

インド渡航歴40回超!

佐藤良純の No. 17

インド・釈尊あれこれ紀行



釈尊が素毘に付された場所に残るラマパール塚



ニルバーナ寺院の涅槃像

釈尊臨終の地 クシナガラ



名古屋の製薬会社がクシナガラに寄付した病院。看板に漢字が書かれている

ケサリア塔の上部はくずれ落ちてきている。塔の中腹に残る悟りを開いた時の釈尊像



釈尊は王舎城から北西に向けて歩み始め、故郷カピバラヴヴァスツに向かわれ、いくつかの川を越えられた。

通られた町や村は經典に詳しい。そして、次々に記される名前はすべて現在の名前と一致している。

ヴァイシヤリを過ぎても、なお釈尊についでくる信者たちに名残惜しいが帰るよう促すため、ヴァイシヤリ郊外の現在のケサリア塔の付近に川を造りあきらめさせた、と伝えられている。

現在でも塔の周辺は湿地帯である。

さらに進み、途中チュンダ信者の供養したきのこ料理のため病気になったが、どうにかクシナガラに着かれた。そこで釈尊はサラ樹の下で休まれた。

この樹はとても固く、真っ直ぐに伸び、高くなる。この樹の下で釈尊は亡くなられるが、その時、サラの樹は悲しみのあまり枝が白く

ストゥーパの奥にサラ樹が
植えてある



ニルバーナ寺院。右がメイン
ストゥーパ、左が涅槃像が祀
られているニルバーナ寺院



涅槃像の前で読経する
インド僧

なり、遠くから見ると鶴の群に見えたので鶴の林と呼ばれた。

また、ヒラヌヤバテイ川の近くで亡くなられたとも伝えられている。当時のインドでは長生きの80歳であった。

亡くなられる前に弟子たちの、これからは何を抛り所とするかとの問いかけに、私の説いた教え、自分たちの信条を頼りにせよと説かれた。法灯明、自灯明である。「灯明」の原語は、サンスクリットでは灯火を、パーリ語では川の中洲を意味する。

釈尊の遺体は弟子たち全員が到着した後、金、銀、鉄の棺に納められ火葬された。遺骨はドローナという人により八等分され、八か所に塔が建てられた。ちなみに、ドローナとは重さの単位を意味するので、普通名詞が固有名詞に使われたことになる。

後世の絵画、いわゆる涅槃図を見ると、臨終の場面に何故か猫がいない。伝説によると

ヒンドゥー教では亡くなった人が
住むためにこうした家を建てる。
この習慣はクシナガラだけである



ニルバーナ寺院の涅槃像

佐藤良純

大正大学名誉教授

さとう・りょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学
同大学院、インドテリー大学院に学ぶ。昭和34年より大
正大学で教鞭をとり、教授、学科長を経て、平成14年退
職、大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和
38年、以来インドへ訪れること、40有余回。著書に『ブッ
ダガヤ大菩提寺』、『釈尊の生涯』など多数。

釈尊の母が葉を天から投げたが高い木の枝に
引っかかって落ちてこない。そこで鼠が取ろ
うとしたが猫が邪魔をして取りに行けず、釈
尊が早く亡くなったため、と伝えられている。
この話は日本の干支に猫がいないことを思い
出させる。

七世紀にこの地を訪ねた玄奘三蔵はその著
『大唐西域記』に、ヒラヌヤパティ川の西岸
に近いところにサラ樹が四本あると記す。そ
ばにアシヨーカーカ王の立てた塚と塔もあると
記されているが現存していない。

釈尊を荼毘に付したところにラマーズ塚と
いう名前の塔が建てられている。そして、巨
大な釈尊の横になった像を祀る涅槃堂がある。
また、発掘された遺骨を収めた舍利容器は、
ピプラヴァとヴァイシヤリで発見されている。